

井上和奏, 伊藤遥香 担当教員: 塚田英晴 平健介 加瀬ちひろ 片平浩孝 山本誉士

## 研究の背景と目的

都市には、意外にも様々な野生動物が生息し、特有の都市生態系を構成している。生活空間を共有することから、ヒト・動物・環境の三者の健康を一緒に考える「ワンヘルス」という考え方が必要となる。

本研究では、都市ダヌキに注目し、その食性を通じて、タヌキ自身の健康状態や生息環境の健全性を評価し、ワンヘルス実現への取り組みを考えた。



## 研究・調査方法

こどもの国(横浜市)は、市街地に囲まれた場所にあり、大規模な都市緑地である。こどもの国において、タヌキのタメフンを採取し、研究室に持ち帰った後、洗浄、内容物の分析・カウントを行った。さらに、春、夏、秋、冬の季節別に集計した。異なる調査地と、人為物利用の比較を行った。

調査期間: 2020.12.14-2021.12.04 サンプル数: 48

## 結果と考察

全期間を通じて、果皮・果肉・種子の割合が44%を占め、次いで昆虫類、植物質を利用していることが分かった(図1)。食性は季節により変化しており、冬では人為物が増加していた(図2)。これは冬では果実や昆虫の数が減少するので、空腹を満たすためだと考えられた。人為物に注目し、市街地での先行研究と比較すると、占有率・出現頻度は、年間・冬いずれも低かった(表1)。このことから、こどもの国においては、人為物に依存することなく生息し、果皮類・果肉類・種子類、昆虫類、植物質類を主な資源としている。タヌキの生息環境として良好な環境であると考えられた。フン分析を通じて得られた食性から、タヌキの健康状態や生息環境の健全性を明らかにすることができた。

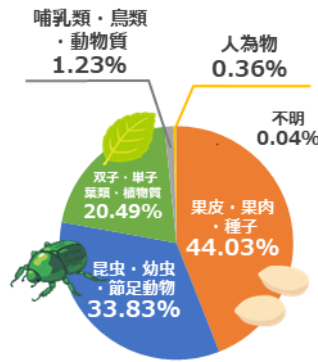


図1 占有率の年間比較

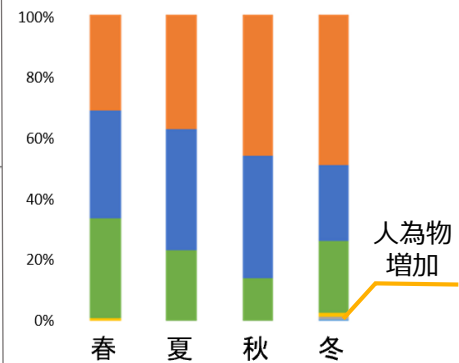


図2 占有率の季節別比較

表1 各地域における人為物利用の比較

調査地1	年間		冬	
	占有率 (%)	出現頻度 (%)	占有率 (%)	出現頻度 (%)
こどもの国	0.4	8.3	1.3	27.3
神奈川県, 川崎市 ※1	23.6	61.3	9.3	16.7
神奈川県, 川崎市 ※2	49.1	75.9	83.3	68.0
神奈川県, 川崎市 ※3	47.2※5	72.0	87.5※5	60.0
東京都, 皇居 ※4	—	12.4	—	13.8

引用: ※1塚田ら, 2019, 川崎市青少年科学館紀要(29), 5-15 ※2山本・木下, 1994, 川崎市青少年科学館紀要(5), 29-34 ※3山本, 1991, 川崎市自然環境調査報告Ⅱ, 185-194 ※4酒向ら, 2008, 国立科学博物館研究報告A類34, 63-75 ※5 量指数で算出

## これから

- ・さらに分析を行ってサンプル数を増やし、タヌキのより詳しい食性を知る。
- ・都市部に住む野生動物が人に及ぼす影響を寄生虫などの面から調査する。
- ・野生動物の食性・行動に関する新たな評価方法について学ぶ。